

京極御息所歌合の位置

田原 加奈子

一、はじめに

延喜二十一年（九二二）三月七日、宇多法皇は春日神社を参詣、京極御息所（藤原褒子）とその所生雅明親王を伴っていた。そこへ大和守の藤原忠房が、二十首の歌を献じた。御幸の後、二十首に対する返歌を女官たちが詠み、左右の方に分かち、さらに夏の恋の二番を加えて、都合二十二番の歌合として披講した。これが、京極御息所歌合である。

この歌合は、贈歌に対する返歌を左右に分けて番える、返歌合という特殊な形式であり、その初例となる。この形式は後に、天曆二年（九四八）に行われる陽成院一宮姫君達歌合に継承されるが、類例はごく少ない。研究史的には、まず日本古典文学大系『歌合集』（以下、旧大系）⁽²⁾において頭注・訳が施され、西山秀人・岡田博子・小池博明が注釈を行っている。⁽³⁾返歌合という、特殊な形態を持つこ

の歌合において、歌合という晴の性質と、贈答という藝の性質とが、どのようなバランスで成立しているのだろうか。本稿では当該歌合の和歌史的位置づけを、主として表現面から検討してみたい。

二、京極御息所歌合について

京極御息所歌合について、いま少し確認をしておく。十巻本の仮名日記部分からの引用を、以下「」を付して示す。なお、本文は旧大系による。

延喜二十一年三月七日、京極御息所褒子（以下、褒子）は宇多法皇（以下、宇多）とともに春日神社に参詣した。大和守である藤原忠房が接待し、「篋をいとをかしげに作りて、御菓子いれたり。甘なむ、ありける御車に入る、。色紙に書きて、歌どもをなむつけたりける」という趣向があつた。「いとをかしげ」に作った籠には「御菓子」を入れ、それが二十もあつたのだから、事は盛大である。色

紙に書いた歌が付けてあったという。本文を見ると、十三番の返歌合を行った後、「十宮の御車に入れたる」とあるので、二十のうち七つは「十宮」、つまり雅明親王⁴の御車に入れられたとわかる。旧大系の注には「親王は、御幸当時の延喜二十一年三月には、まだ初誕生前であったから、母尚侍と一緒に春日に行かれたのであろう」とある。

さて、この御幸の当日には「さうさうしくて」返歌をすることができなかったもので、帰京後、女官を左右に分ち、歌を詠ませ合わせたという。左の頭は「帝の御女源氏」すなわち源順子、右の頭は「御息所の御妹五君」すなわち藤原時平五女であった。判者は、事の発端をなした贈歌主の忠房を、大和から召した。忠房は延喜十三年（九一三）に行われた亭子院歌合の折、「忠房やさぶらふ」と宇多が尋ね、「さぶらはず」と不在を告げられた宇多が物足りなく思われたと記されたこともあるごとく、宇多の寵臣である。その忠房が判者を務めるのだから、さぞ宇多にとって期待の高い歌合であったことだろう。講師は左が伊衡、右が紀淑光で、左右それぞれ赤色、青色を基調とした衣装をまとい統一感を演出、洲浜の趣向も凝らされ、盛大な催しであったと記録されている。

このような次第を閲すると、所役の役割も細かく設定され、衣装や洲浜にいたるまで周到に準備された歌合であったとわかる。この歌合においてどのような和歌が詠まれ、それはどのような意義を持ち、そしてこの歌合は和歌史的にどのように位置づけられるのだから。

うか。忠房が贈った歌、女官たちの返歌を、それぞれ検討していきたい。

三、忠房の贈歌（本歌）

まず忠房から献上された和歌（以下、本歌）をみる。本歌は二十首。そのうち躬恒の代作とされるものが七首あるが、以下、それらも含め本歌とする。うち十三首は「御車」（褒子の御車）へ、七首は「十宮の御車」（親王の御車）へ入れられた。

本歌に詠みこまれる語句を一覧すると【表1】のようになり、最も多いのは「春日（野／山）」の十四例である。春日神社への参詣の折で、当然とも言える。次に多いのが「桜（花）」の八例。続いて「三笠山」、「春」、「君」、「御幸」の四例。季節を示す語や、御幸に直結する語句が詠まれる。「春日山は花山、若草山、三笠山などの、春日大社の背後に連なる山全体を称する」と言われ、「三笠山」は「春日（野／山）」の一部と考えると、最も多く詠まれるのは御幸の地ということになる。そこに季節の景物として「桜（花）」が詠まれるという形式が基本のようだ。

それぞれの主題を確認していくと、おおむね①御幸賛美、②土地褒め、③景物褒め、④女官賛美に大別できる。②土地褒めと③景物褒めは相互に重なりあうこともあるように、この場を考えると当然、②③④の主題を詠むことで①御幸賛美を意味することにもなる。歌

【表1】 本歌に詠まれた素材

素材	御車				十宮の御車				用例数	
	7	16	31	49	43	49	52	55		58
▽場所										
春日(野/山)	1	10	16	19	25	31	34	37	40	43
三笠山	4	7	28	40	43	49	52	55	58	14
ふるさと										
ふるきみやこ	22	25	34	49						2
▽春の景物										
春	19	31	34	55						4
桜(花)	4	7	10	58						8
うぐひす	16		13							1
若菜		19								1
若紫										1
春風				40						1
青山(襖山)				46						1
春霞				46						1
▽人										
みやこびと				52						1
八乙女	1									1
神(のきね)	1	10								2
君	13	19	25							4
野守	19		31							1
▽ほか										
御幸	7	16	31	49						4

*1 表中の数字は歌番号

*2 アミカケは躬恒の代作と見られる歌

数としては①御幸賛美のみを詠じたものが最も多いが、②土地褒め、③景物褒め、④女官賛美の歌を本歌の特徴的なものとして以下に挙

京極御息所歌合の位置

げ確認していく。まず土地褒めと見られる歌。

さくらばな御蓋の山のかげしあればゆきとふるともぬれじと
ぞおもふ (四)

桜を雪に見立てることと、三笠山を宇多の天蓋と見立てることが同時に行われている。景物として三笠山の桜を詠むという組み合わせは本歌二十首中八首に見られ、多くを占めるが、実は和歌史上にこの組み合わせを見たとき、その用例は多くない。万葉集に、

春日なる三笠の山に月もいでぬかもさきやまにさけるさくらの
花のみゆべく (卷十・一八八七)

との例があり、同歌は古今六帖(第四・二五二二)にも載る。また、宰相中将君達春秋歌合に、

さくらさくみかさの山のかはゆみを春のまとるにいとこそみ
れ (九四)

祐子内親王家歌合に、

さけばなほきてみるべきはかすみたつみかさのやまのさくらな
りけり (四番右・範水)

と詠まれる例がある程度だ。「三笠山」を詠む場合、名義の縁で「傘」を掛けて詠み、古今集の

あまの原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも
(羈旅・四〇六・仲麻呂)

の影響から「月」を合わせ詠むことがよく見られるのが、基本線である。「歌ことば歌枕大辞典」⁽⁶⁾は、

『万葉集』卷三に山部赤人が春日野に登って作った「高座」た

かくらゝの三笠の山に鳴く鳥の…」（三七三・三七六）があり、

「高座の」は三笠の枕詞、天皇の玉座（高御座）には天蓋があ

るので「三笠」に掛けた。また、同じく卷八に大伴家持の「大

君の三笠の山の秋黄葉もみぢばは…」（一五五四・一五五八）

などがある。山名は天皇など高貴な人にさしかける天蓋の意で

あった。

と記す。忠房の本歌は、三笠山を宇多の天蓋と見立て、その「かけ」にあるので濡れないと、「傘」と掛けつつ、同時に天蓋のイメージをも内包しており、三笠山を賛美するがそれは同時に宇多の御幸賛美となっている。宇多の来駕を喜び、桜の舞い散る情景を、仮にこれが本当の雪であったとしても、宇多の御蔭により濡れることもないといい、桜の美しさを賛美しながら、御幸を賛美することを兼ねているのであった。同じく当地の桜を詠む、③景物褒めの歌を見よう。

やへたてる御蓋の山のしらくもはみゆきさぶらふさくらなり
けり
(七)

三笠山に見える白雲は桜だったのだ、と桜を白雲と見立てるが、この見立ては古今集以来多くの例がある⁽⁸⁾。そしてこの桜は、御幸を迎えるものだったのだと詠嘆することで、御幸賛美となる。

三笠山の桜を詠む例が少ないように、「春日山」の桜は万葉集に

みわたせばかすがののへにかすみたちさきにはへるはさくらば

なかも

(卷十・一八七二)

が見られるものの、さらに用例は少ない。本歌には次のようにみえる。

うぐひすのなきつるなへに春日野のけふのみゆきをはなとこ
そみれ
(一六)

「み雪」と「御幸」の掛詞がはたらくが、当日（三月七日）雪が実景として存したとは考えにくい。初句二句「うぐひすのなきつる」は既に春が到来したことを示す。三月なのだから晩春。その春日野を訪れた今日の「みゆき」を「はな」と見る、という。「はなとこそみれ」は「花（栄光）」だと見ることですよ（旧大系）と訳されるが、この「はな」は当然、桜の景を含み、かつ御息所を伴った御幸が盛大であることを示す。桜の花の愛で方が、ひとつの花に注目するのではなく、咲き乱れる桜の木々を一带に眺め愛でるごとく、御幸に随行した褒子および女官たちの華やかさを賛美しているのである。同じく「はな」と賛美する本歌がもう一首あり、これは女官賛美を通じた御幸賛美となっている。

ちはやぶる春日の原にこきまぜてはなともみゆるかみのきね
かな
(一〇・躬恒⁹)

「きね」は「神に仕え神楽や占いをする女性、または男性」⁽¹⁰⁾であり、官たちがなぞらえられているだろう。青々とした春日の原に咲き乱れる桜の花という、色彩の対比を想起させる表現である。「こきま

ぜて」の句は素性の、

みわたせば柳桜をこきまぜて宮ごぞ春の錦なりける

(古今集・春上・五六)

の歌と同様の視点からのイメージであろう。「はな」と見立てるのは「かみのきね」であり、御幸に供奉する女官たちの華々しさが暗示される。他に、「はな」とは見立てられてはいないが、「かみのきね」の表現と重なる「やをとめ」を用いた本歌がある。

めづらしきけふの春日のやをとめをかみもこひしとしのばざ
らめや

(一)

「めづらしきけふのかすがの」は御幸の光栄を言う。「やをとめ」は神事に仕える八人の少女を指し、旧大系の注にあるように、褒子の車に入れられた歌であるから、供奉の女官たちをなぞらえていよう。⁽¹¹⁾それを、(春日神社の)神も恋い慕うだろうといい、賛美を表出する。

以上に挙げたのは褒子らの車に入れられた本歌だが、「十宮の御車」へ入れられた七首の歌を見ると、その第一首には、

ことしよりにほひそむめり春日野のわかむらさきにてでなふ
れそも

(四〇)

がある。「ことしよりにほひそむめり」、「わかむらさき」の語句は、御幸当日、まだ誕生から一年に満たぬ親王を指しているよう。「若紫」の話は、

かすがのわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられ

ず

(伊勢物語・初段)

むさしのにいろやかよへるふぢのはなわかむらさきにそめてみ

ゆらむ

(亭子院歌合・二九)

などが先行する程度で、まだ珍しい表現である。以降の六首に親王を示す表現は見られず、御幸全体を賛美する和歌が続いていく。親王のもとに贈られた第一首に、意図して親王の存在を詠みこむ表現があるが、褒子の御車に差し入れられた第一首には、御幸供奉の女官たちを暗示する詠が置かれていた。忠房の献上歌は、当初から贈呈する相手として女官たちが意識されていた。

四、女官賛美の意図

忠房が献じた和歌が、このような賛美を遇している意味は、奈辺にあるのだろう。既述の通り、当日の様子は仮名日記に詳しい。和歌献上は忠房のもてなしのひとつであった。和歌がどのように献上されたかと言えば、「をかしげ」に作られた籠に「御菓子(くだもの)」とともに色紙に書かれた和歌が付される形であった。「くだもの」についての具体的な説明はなく、和歌にも表されないが、三月という季節柄、梅子(うめ)や枇杷子(びわ)が想像できようか。⁽¹²⁾それが二十個もあるというのだから贈り物としては壮観である。そしてそれらは御車の中へ入れられ、女官たちのもとへ届けられた。

和歌を物に付して贈るといえるのは例に尽きないことだが、「をか

しげ」に作られた籠という設定や二十もの数があることを想像すると、この構図は、歌合の洲浜さながらである。洲浜に和歌を付けることについては、たとえば亭子院歌合に次のように記されている。

歌は、かすみのはやまにつけたり、うぐひすのは花につけたり、ほととぎすのはなにつけたり、夜のうたは、うぶねしてかがりにいれてもたせたり

色紙を配置したさまがこのように説明されるが、洲浜の中の各所に装飾として配されたことがわかる。忠房から贈られた和歌は、「をかしげ」に作られた籠に「御菓子」とともに色紙に書いて付されている。歌合では洲浜に和歌を付して鑑賞されるように、忠房からの贈り物も籠に入れられ、鑑賞されるものとして作られている。まるで歌合の洲浜のように仕立てられていた。

これを受け取った側は、どう理解するだろう。和歌の趣意が御幸賛美であることは自明だが、その中に、女官賛美を通して御幸を賛美する詠がみえる。繰り返すが、忠房の献上歌は褒子の車へ入れられ、贈り先として意識されたのは女官たちである。まるで歌合を彷彿とさせる仕掛け、趣向がたくまれている。受け取った彼女らは自分たちに向けられたと理解し、和歌の返しを考えるだけでなく、それをどう提示するべきか、その方法にまで考えが及んだことだろう。記録には当日「さはがしくて」返せなかったとあるものの、このような手の込んだ仕掛けに対し、それに見合う返歌の場を設けることに時間が必要だったのだ。忠房の行為は、もてなしであると同時に、

褒子および女官たちが歌合を開催する動機づけとなるものであった。また、返歌の歌合の後に右方は「帝の御前にも参らせける。沈の折敷四つして、銀の土器などぞありける。箸の臺の洲濱の歌。」として

春日野のやまとなでしこをりてけるこ、ろをひとはおもひしらなむ

の歌を付している。洲浜に付されたこの歌は、洲浜仕立てで贈られた忠房の贈歌を受けて行ったこの返歌合の出来を、主導した宇多に問うものだったのではないか。

五、後宮歌合のなかで

前節で、忠房の行為が歌合催行を導く動機をなしたことを述べたが、それはどのような意味があるのだろうか。後宮の歌合にはどのような発展史があり、京極御息所歌合がどのように位置づけられるかを考えたい。

後宮で行われる歌合を【表2】にまとめたが、現存資料から、褒子の寛平御時后宮歌合に始まると考えられる。寛平四年（八九二）頃、宇多が母班子の六十賀を祝う目的で催した歌合で、春・夏・秋・冬・恋の各二十番、計二百首から成る大規模な歌合であるものの、行事や判の記録もなく、和歌も一部欠落している。歌数が多く、歌合史の初期においてこれほど大規模な行事が実際に催されたとも思

【表2】 後宮の歌合

開催年次		歌 合
寛平4頃	[892]	寛平御時后宮歌合
寛平8以前	[896]	寛平御時中宮歌合
寛平9頃	[897]	東宮御息所小箱合
延喜21	[921]	京極御息所褒子歌合
延長8以前	[930]	近江御息所周子歌合
天曆10	[956]	麗景殿莊子歌合
々		宣耀殿女御芳子歌合（瞿麦合）
天徳3	[959]	齋宮女御徽子歌合（前裁合）
		中宮安子歌合（庚申待）
（天徳4	[960]	内裏歌合）
天禄3	[972]	女四宮歌合
寛和2	[986]	円融院女御詮子（瞿麦合）
		：

われず、机上の撰歌合と考えられている。⁽¹³⁾ 実質的な推進者である宇多は、本歌合を新撰万葉集の撰集資料としており、後宮の歌合ではあったものの、後宮側の意図が徹底されたものではなかった。左右を番える歌合の形式を取るが、多くの歌を列挙するところに意味があったものと考えられる。

次にくるのが寛平御時中宮歌合である。「中宮」には三人の候補（班子、胤子、温子）が考えられるが、「内容自体に疑わしい面があつてこれ以上の究明は不可能」で、「一六・一九番歌が古今集に延喜五年（九〇五）の藤原定国四十賀における屏風歌としてみえ、二一番歌が後撰集に昌泰元年（八九八）の宇多上皇吉野行幸の際に詠ま

れた歌として在って、ともに古今集や後撰集から採用された可能性が強いからである」⁽¹⁴⁾とされる。続く東宮御息所小箱合も、伊勢との関連は見受けられるものの、⁽¹⁵⁾詳細は不明であり、物合に付随した和歌行事と考えておくほかない。

その後、二十年以上の空白を措いて行われるのが、当該京極御息所歌合である。様相がはっきりしている歌合としては、寛平御時后宮歌合に次ぐ。この間、後宮で歌合は、まったく行われなかったと考えにくいのが、記録されるほどのものはなかったのか、あるいは記録されていても後世に伝えられてこなかった。それから十年ほどのちに、近江御息所周子歌合がある。しかしそこには、「宮すどころのさうしにて、宮の花といふうたをあはず、右はあはず」とあり、一題一首で二十首、歌合といつても左右番えた形跡はなく、春から初夏にかけての植物が詠まれている。題には、「さるとりのはな」や「みつつじのはな」という、和歌に馴染みの無い植物を、単に名称にひかれ設定したとみられるものもあり、二十首中五首は物名歌である。「宮すどころのさうし」で行われ、「宮の花」を詠んだのであるから、周子を囲む女房たちの季節の娯楽であったのだろう。さらに二十年以上の空白を措き、麗景殿女御莊子歌合、宣耀殿女御芳子歌合など村上朝後宮の歌合へ時代が移る。村上朝の後宮歌合では、歌を番えることが必ずしも勝敗意識とは結びつかない傾向を持つ。その目的は、和歌同士に連関を持たせたり、主催者である後宮の主褒めであったり、庚申待ちの夜の遊戯であったりという調子

であった。そこにみえるのは所謂「君臣和楽」の要素で、競技とは縁遠く、あくまで宮廷の文化的嗜好から発したものだ⁽¹⁶⁾。

このような後宮の活動の後に、女房たちが、男の詩合に対抗して催したとされる天徳四年内裏歌合がくる。以降は、天禄三年（九七二）に女四宮歌合、寛和二年（九八六）に詮子の瞿麦合があるが、それぞれ十年以上の間を空けて行われたにすぎず、歌合行事は下火になっていく。

後宮歌合の初期にあたるものをみてきたが、必ずしも後宮側の主体的意図は、そこに反映されていないようである。たとえば班子歌合は、六十賀のひとつのイベントであった。歌人は男性のみを記録し、仮名日記を伴わないため詳細はわからないが、女房たちの意向が反映したようには見えない。その点では小箱合は物合であり、また周子の歌合は「宮のはな」を詠むものにすぎず、これらは後宮の文化活動の一端といえよう。

こう考えてみると、京極御息所歌合は、忠房が女官たちにもちかけたことを端緒に開催された歌合である。延喜十三年に亭子院歌合を開催した宇多の監督下、褒子は装束や洲浜を整え、講師や判者を招聘し、整備された歌合を催すことができたのである。歌合は忠房の贈歌に対する返歌を合わせる返歌合の形、すなわち贈答歌の体であった。つまり贈答としてどちらの歌が優れているかを競う勝負である。では返歌は、どのように詠まれているのだろうか。

六、女官たちの返歌

すべての結番について触れることはできないが、ここでは五つの返歌を例としてその性質について検討する。一つは返歌の主の意識がわかりやすいよう、女官たちに向けられたもの、つまり女官賛美の本歌に対する返歌を見る（二一、三番、一一、一二番）。また、それとは反対に女官たちに意識の向けられていない、親王の車に入れた歌に対する返歌（四一、四二番）、そして本歌の多くを占める単純な御幸賛美に対する返歌（二〇、二一番、二六、二七番）について検討する。

まず、女官たちに向けられたとみえる、一首目の本歌とそれに対する返歌をみる。本歌「めづらしきけふの春日のやをとめをかみもこひしとのばざらめや」（二）は、「やをとめ」に供奉女官を重ねて賛美するものであった。これに対して、左は恋歌仕立て、右は賀歌仕立てで返歌をしている。

やをとめをかみししのばばゆふだすきかけてぞこひむけふの くれなば
(二・左)

左歌は「やをとめ」「かみ」「ゆふだすき」が縁語。「ゆふだすき」は「木綿で作った襷の意で、神事の折に肩にかけて袖をからげるもの⁽¹⁷⁾」であり、「かく」の枕詞として機能し、

ちはやぶる賀茂の社の木綿だすき一日も君をかけぬ日はなし

(古今集・恋一・四八七)

など用例は多い。ここでは心をかけて恋い慕うと詠む。結句「けふのくれなば」は、条件を付すが、今日という日が暮れたならば恋い慕いましょうと歌っている。春日神社参詣の今日が暮れてしまえば、宇多とともに一行は帰る。すると春日にはもういなくなるのだから、「神も恋い慕うでしょう(まして私(忠房)は言うまでもなく)」と贈った本歌に対し、「今日が暮れたら」と条件付きで返す点、うまくかわした歌といえる。⁽¹⁸⁾

ちはやぶるかみしゆるさば春日野にたつやをとめのいつかた
ゆべき
(三・右)

右の歌は、御幸の永続性を詠む賀歌として返歌する。旧大系が『めづらし』の意味を本歌とは違えて返している」と注することく、「めづらし」いこの御幸に伴う「やをとめ」を、神も恋慕うだろうという本歌に対し、神がお許しになるならば永遠に続く返す。意図的に読み違えてかわしたのか、本歌の意図をずらして返しながらも、御幸そのものの祝意を詠むことで、返歌としている。

本歌の四首目「ちはやぶる春日の原にこきませてはなともみゆるかみのきねかな」(一〇)も、女官賛美による御幸賛美であり、女房たちの返歌が解し易い。⁽¹⁹⁾

春日野のはなとはまたもみえぬべしいまこむはるのかざしが
てらに
(一一・左)

左歌は、本歌が花と見間違えるほどと賛美したのに対し、また花と

見えるに違いない、「かざし」を兼ねてくると、当然花であると切り返す。「かざし」は「草木の花や枝葉などを頭髮や冠に挿したのもの」元来、植物の生命力を身につけようとする感染呪術的な信仰から生じ、神を招き迎え幸福を願う意味をもっていた⁽²⁰⁾とされる通り、身に着けることでその力を纏うもので、

春くれば宿にまづさく梅の花君が千年のかざしとぞ見る

(古今集・賀・三五二・貫之)

などの例が参考になる。

はるがすみたちまじりつ、ゆくからにあだにもはなとみえに
けるかな
(一二・右)

右歌は、本歌「こきませて」を「たちまじりつつ」と言い換えた。「こきませず」は細かくちぎったものを混ぜ合わせる意、「たちまじる」は単純にまざる意。⁽²¹⁾西山らの注釈では本歌の「こきませず」は「美的表現」で、それを「美醜について中立的な言葉『たちまじる』で承け、謙遜する」と説く。花に見立て賛美する本歌に対して、それは春霞に交じりながら行くからで、実はさほど美しくはないと謙遜して返した歌である。

右の二例は、褒子の車に入れられた本歌だが、親王(十宮)の車に差し入れられた本歌の返しはどう詠まれたか。その一番目、本歌は「ことしよりにほひそむり春日野のわかむらさきにてでなふれそも」(四〇)とあり、親王を「ことしよりにほひそむ」若紫と表現し、それに触れてはならないとする。

むらさきにもこそふるれ春日野ののもりよひとにわか
なつますな
(四一・左)

「若菜」は「新春に摘む菜」²²であるから三月、歌合の披露された季節にそぐわないが、植物としての「若菜」というより、親王が「若菜」とされているように、供奉の女官たちを「若菜」と表現しているのではないか。そうみると、一行の中の親王に触れるなど言うのなら、あなた(野守)も私たちにも触れないでくださいねとの切り返しと、読むことができる。野守は本歌一九番に「わかになつむとしはへぬれど春日野ののもりはけふやはるをしるらむ」と詠まれているが、この野守も忠房を寓意するものと考えられる。これは野守の立場から、御幸のあった今日初めて春というものを知ったとする御幸賛美の歌だ。ここにいう野守は御幸を迎える土地の者として、忠房を寓意するものと理解できよう。

ちはやぶるかみもしるらむ春日野のわかむらさきにたれかて
ふれむ
(四二・右)

右歌は単純に、誰が触れたか神もお見通しだから、触れることなどできませんよ、ご心配なく、という。本歌と同じく、親王を敬虔なものとして詠み、言い返してはいるが、主題をそのままに返している。本歌の多くを占める、単純な御幸賛美には、どのように返しているだろうか。本歌七首目は野守の立場で詠まれ、「わかになつむとしはへぬれど春日野ののもりはけふやはるをしるらむ」(一九・躬恒)とある。若菜を摘み摘み長い年月を過ごした春日野の野守は、今日

行幸にあい初めてこの世の春を知ったろうと、野守の心情を忖度する形で賛美の歌とする。当該歌に対して、

けふみてぞわれはしりぬるはなはなほ春日の野べのものにぞ
ありける
(二〇・左)

左歌は、野守の実感として、花は春日の野辺で見るのが一番との確信を持ったと詠む。本歌が野守の心情を推測するため、やや焦点がぼやけた印象であったものを、実感する立場から歌を返すことで、明瞭な御幸賛美を表出する。

ありへても春日ののもりはるにあふはとしもわかかなもつめる
しるしか
(二一・右)

右歌は、本歌と同様、野守の状況を察してみせる。本歌が若菜を摘み過ごした長い年月を不遇のように述べるところを、年も若菜も積んで／摘んできたからこそ、御幸に逢うことができた視点を変えて、賛美を形成する。

本歌九首目は「はるごにきみしかよはば春日野のやちよのまつもかれじとぞおもふ」(二五)だが、毎年春に御幸があれば老松も枯れないといい、御幸を寿ぎ、永続性を願う。これに対し、
春日野にはるはかよはむわがためにまつこゝろありてよはひ
ますなり
(二六・左)

左歌は、初二句で本歌の御幸継続に賛同する。私のために待つ松に心があり、その齢を増しているというが、「よはひ」を「ます」の表現は珍しい。

春日野にまつしかれずはみたらしのみづもながれてたえじと
ぞおもふ
(二七・右)

右歌は、松が枯れないのなら御手洗(川)の水も絶えなるとする。

「みたらし」は、身を清めるための社前の川。『袖中抄』が「いづれの社にも河あらば読むべし」とするように、特定の川を指すものではないが、賀茂社、春日社などに詠まれることが多く、ことに賀茂社の御手洗川が歌枕として固定していく。⁽²³⁾ その御手洗川が「たえじ」とは、春日神社の永続性をいっており、本歌が御幸を寿ぎその永続性を詠むのに対し、春日神社の永続性を寿ぐものとなる。

女官たちの返歌は、贈答歌の方法に則っている。贈歌が用いる語句を用いつつ、その意図をずらしたり、切り返したり、やりこめたりする、という手法である。しかし日常の贈答歌と決定的に異なるのが、歌の基本に御幸賛美がある点だ。いくら切り返しても、やりこめても、賛美を損ねてはならない。制約が加わっているのだ。本歌が女官たちを暗示している場合は、切り返しややりこめが有効だが、賛美が主題の本歌には、語をずらしても、賛美はそのままに、穏当な返歌に落着かせていた。もちろん藝の贈答に賛美を持つものもあるが、ここでの賛美は詠者の任意によるものではなく、御幸に際するものという場の問題と合わさっており、制約ともいえる条件だ。贈答歌という藝の詠歌方法を採用しながら、この制約が、歌を晴のものへと昇華させているとも言える。

京極御息所歌合の位置

七、おわりに

本稿では京極御息所歌合について、忠房の献上した和歌の表現と、女官たちの返歌の表現を分析した。忠房の献じた和歌は表現面では用いた語句の組み合わせが用例の少ないという点で目を引く。内容は御幸賛美を前提に、土地や景物賛美を通じた形で詠むほか、女官賛美を詠んでいた。それが和歌をくだものの籠に付すというパフォーマンスであったところから、女官たちの歌合開催へと事を展開させるものとなった。女房たちの返歌は、御幸賛美という基本線の中で詠まれるが、方法は贈答歌の方法と同様、相手の歌の語句を用いながら、意図をずらしたり、切り返したりした。忠房の贈歌に返歌をすることで、あたかも恋歌の応酬のごとくなったり、贈歌が補完され、より強い賛美となったりするのだった。

京極御息所歌合は、忠房の誘い掛けに応じる形で開催されたが、和歌の詠み手はすべて女官たちであり、後宮の意向が強く反映された歌合といつてよいだろう。うちうちに催された歌合とは異なり、形式を整え開催された、晴儀の行事としての歌合に近く、そこにこれほど女性が深く関与していることは、まことに意義深い。

漢詩においては、節日や行幸など公的行事における詩作が、君臣和楽の精神に基づく政治性を濃く帯びたものであったとは周知の通りである。詩作に女性が直接関与することはなく、女性を詠む表現

がいくつかの段階を経て行われるようになったにすぎないが、後宮

の繁栄に伴い、宮廷の女性たちへの関心は高まり、存在感を増していった。女性を詩作中に取り込むことで、男性たちもその存在を認めたと、女性たち自身は歌合に関与していくことで、宮廷社会の文学的地位を確保したのである。京極御息所歌合は、後宮の内々遊興の趣が強かった歌合から、宮廷行事として歌合が確立していく過渡期にある。歌合史上、重要な位置にあるといえる。

歌合は、女性の側から、男の君臣和楽の世界へと足を踏み入れた場ともいえる。和歌は男女共通の文化であり、それによって、君臣和楽を体現する詩作や詩合の場を移し替えたのが、歌合と考えられる。杉山康彦は、天徳内裏歌合にある、女房たちが男の詩合に対抗し催したとする歌合日記の記述について、「女性が内裏に進出し内裏で行事を催すためには歌合以外になかった」と記している⁽²⁵⁾。

歌合における女性の位置づけは、時代とともに変化していった。

亭子院歌合（延喜十三年（九一三））では、左右の頭に宇多の皇女二人をあて、詠出された和歌の左一番には伊勢の歌が置かれ、講師も女房であった。こうした女性関与に比すならば、京極御息所歌合の意義はまた異なる。忠房の献上歌が、直接女房たちを触発して催行のはこびとなり、和歌はすべて女官たちが詠んだ。この歌合から天徳内裏歌合までは、なお時間を隔てるが、後宮歌合の変化態のひとつ、女房発案とされる天徳内裏歌合以前の、行事性の強い歌合に、女性が深く関与した事例として、重要で注目すべき事績と定位して

おきたい。

注

(1) 陽成院一宮姫君達歌合は古歌に返歌をする形式を取っており、これもまた特殊である

(2) 萩谷朴、谷山茂 校注『歌合集』（日本古典文学大系74 岩波書店、一九六五年）

(3) 西山秀人、岡田博子、小池博明「京極御息所褒子歌合注釈（一）、（二）、（三）」、『上田女子短期大学紀要』第二十七号（二〇〇四年一月三十一日）、二八号（二〇〇五年一月三十一日）、二九号（二〇〇六年一月三十一日）

(4) 褒子は宇多帝在位時の后ではなく、退位後かつ落飾後に寵を受けており、雅明親王の誕生も宇多出家後のことであった。したがって醍醐天皇皇子として親王宣下を受けている（『本朝皇胤紹運録』）

(5) 『歌ことば歌枕大辞典』「春日」の項、鈴木徳男執筆

(6) 『歌ことば歌枕大辞典』「三笠山」の項、鈴木徳男執筆

(7) 前掲注(3)西山らの注釈においても同様の指摘がある

(8) 白雲と見立てる例は古今集、後撰集に次のような例がある
桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲
（古今集・春上・五九・貫之）

み吉野のよしの山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ
（後撰集・春下・一一七）

(9) 結句「かみのきね」は「みやこびとかな」の校異がある。十卷本ミセケチおよび躬恒集では「みやこびとある」。旧大系では「みやこびとかな」のほうを「正しいか」とするが、西山らの注釈では枕詞「ちはやぶる」を冠していることから「かみのきねかな」の本文を原態と考えている

(10) 『歌ことば歌枕大辞典』「きね」の項、錦仁執筆

(11) 旧大系では「御幸に供奉した女官たちにかけて詠んだ歌」とされ、西山

らの注釈でもこの注を支持し、訳に「行幸に供奉する美しい女官たちを見て、神もさっと心を動かすに違いない」と付記する

- (12) 「くだもの」は「木や草になる食用の果実。水菓子」（『日本国語大辞典』とされ、「果物」や「菓子」の字が当てられる。また、参考までに関根真隆『奈良朝食生活の研究』（吉川弘文館、一九六九年）を見ると、春の「くだもの」としてこれら梅子や枇杷子が挙げられている

- (13) 『新編国歌大観』解題、村瀬敏夫執筆

- (14) 『新編国歌大観』解題、片桐洋一・中周子執筆

- (15) 萩谷朴「東宮御息所小箱合と伊勢傳記資料」（『国語と国文学』三十二巻五号、一九五五年五月）

- (16) 拙稿「村上朝の後宮と歌合」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六二輯、二〇一七年三月）

- (17) 『歌ことば歌枕大辞典』「木綿襷」の項、古相正美執筆

- (18) 前掲注(3)西山らの注釈では「今日の暮れなば」の後に省略されることは何か問題だが、今日が暮れたら来て下さい、すなわち神に姿を現してほしいということか」とするが、省略ではなく倒置である

- (19) 左方、忠房、宇多とのやりとりを記した記録文が付されているが、わかりにくい。結論としては「右方負になりぬ。右方は、よみにだにもよませず」とあり、右の歌は披講させてもらえなかった。ここでは披講の有無は問題にせず、どのように返歌が詠まれたのかだけを確認する

- (20) 『歌ことば歌枕大辞典』「かざし」の項、小川豊生執筆

- (21) 『日本国語大辞典』

- (22) 『歌ことば歌枕大辞典』「若菜」の項、久保田啓一執筆

- (23) 『歌ことば歌枕大辞典』「みたらし」の項、黒田彰子執筆

- (24) 井実充史「君臣和楽における女性描写の政治性―勅撰三集艶情表現の基底にあるもの―」（『福島大学教育学部論集』第七五号、二〇〇三年十二月）

- (25) 杉山康彦「平安朝の女性と和歌―歌合を中心に―」（『国語と国分学』一九五〇年十二月）。また、歌合と女性に関しては、浜島智恵子「平安女流

歌合の研究」（愛知県立女子大学『説林』八号、一九六一年十月）、田淵句美子「歌合の構造―女房歌人の位置―」（『和歌を歴史から読む』二〇〇二年十月、笠間書院）などの論がある

*本稿における和歌引用は、京極御息所歌合は旧大系により、そのほかの和歌は新編国歌大観（日本文学センター図書館、和歌俳諧ライブラリー）により、一部表記を改めた。また、『歌ことば歌枕大辞典』および『新編国歌大観』解題の引用は日本文学センター図書館によった。